

た。

こう見てくると、市民が間違われて連れていかれた可能性も否めない。しかし右のような方法によって、良民か中国兵かを区別するために、その手続きがとられていたことは初めて知ることであった。次に、連行された中国兵はすべて処刑されたのだろうか。ラーベ委員長の十二月十六日の日記には、「晩に岡崎勝男上海総領事が訪ねてきた。彼の話では、銃殺された兵士が何人かいたのは確かだが、残りは揚子江にある島の強制收容所に送られた」(一二二頁)と書かれている。

そしてまた榎原主計少佐(上海派遣軍後方參謀)も、捕虜の收容にあつたことを次のように記していた。

《軍の入城式は十二月十七日であつたが、私は入城式に先だち、十三、十四日頃、中山門から市内に入りました。俘虜は相当あるのではないかと思いましたが、支給する食糧や收容場所などが決定しなかつたので、「取り敢えず各隊で持つておれ、移管の時機は速やかに示す」こととしました。

ところが、無錫の倉庫で米約六、〇〇〇袋を押収したとの報告をうけ、また刑務所や監獄が使用できなくなったので、入城式の前後に俘虜の移管を受けた記憶があります。

中央刑務所に收容された俘虜は約四五千であつたと思います。それは翌年一月、上海地区の労働力不足を補うため、多数の俘虜を列車で移送し、約半数二、〇〇〇を残したように記憶しております》(証言による〈南京戦史〉⑪「八頁」)

このように連行された中国兵がすべて処刑されたわけではなかつた。第四章でも見たように、処刑されなかつた中国兵たちは苦力として使われていた。